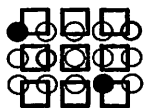


ハンディ持つ教師の門戸拡大を

●全国視覚障害教師の会が公開シンポ



視覚障害のある教師らで作る「全国視覚障害教師の会」(長井仁代表)の全国研修会がこのほど、広島市内で開かれた。最終日には公開シンポジウムがあり、目の見えない三人の現職教師が日ごろの実践内容を報告した。

自己鍛錬と周囲の協力があれば目の不自由な人でも十分教職を務まるし、ハンディキャップを持つ教師は生徒の心を育てるプラス面がある。初めから無理だと決めつけないで——。リポートを集約するとこんな内容になる。三人の話からは、教師活動への自負心とともに、視覚障害者の職場保障の拡大を願う切実な思いが伝わってきた。

「板書」は模造紙で事前準備

同会は昭和五十六年、六、七人のメンバーによって関西地区で結成された。以来、教育実践の研修などを重ね、障害者への理解を深めるための活動を続けていた。会員は、視覚障害を持つ教師、教師志望者、退職者に加え、視覚障害になる恐れのある人。現在、会員は四十人余り。中途失明した場合の職場復帰と継続勤務、新規採用の門戸拡大、ハンディ克服のための公的支援——が、当

面の大きな課題だ。

会代表の長井仁さん(ま)は十五年前に失明し、二年間の休職後、職場復帰。新潟県の私立加茂曉星高校で社会科担当として教師を続けている。

この日はまず、長井会長が基調報告。「いろいろな個性の子供がいて、いろんな教師がいるのは当たり前のこと。目が見えないという状態は教師としての適性を欠くハンディキャップになるのではなく、一つの個性を持った存在にしているのではないか」と、視覚障害者を受け入れる側に発想の転換を求めた。

また「目の見えない先生の授業が理解しづらいというのではない。工夫と努力をすれば、児童・生徒にプラスの影響を与えることができるのではないか。われわれは子供たちが学校生活を送る時期に心を育て、成長させていくことができる条件を持っている」と視覚障害教師が持ち得るプラス面も強調した。

数学担当教諭として京都の私立宇治高校に勤務する奥野正博教諭(ま)はこの日、実践報告を兼ねて模擬授業を行った。「黒板に字を書けないと教師はできない」と考えがちですが、事前に準備した

ものを黒板にはっていくことで十分できます」と言いながら、模造紙に書かれた板書を白板にはりつけ、「数列の和」の公式について説明を始めた。

授業前には入念な準備を行う。まず、点字で授業案を作成。自宅では授業案や板書の原稿、練習問題の解答などを点字ワープロで作り、夫人が模造紙に手書きで板書を清書する。教科書や副読本の点訳は、京都ライトハウスなどに個人的に依頼している。授業中の生徒とのやりとりについては「生徒と対話を重ね、(声で)反応を見ながら補助説明を傾けたりしている。特殊な枠を使って、説明は自分で書いています」と解説。「教室には九十近い生徒の目があるのだから、それを利用させていた方がいい」と、生徒の援助を活用しながら授業を進めているさまを報告した。

盲学校勤務から普通高校へ「復帰」

同会の事務局長でもある栗川治さん(ま)は、二十代後半に視力を失った。普通高校から盲学校勤務を経て、現在は社会科の教諭として新潟県立西川竹園高校で教壇に立っている。視覚障害を持つ教師が盲学校から普通高校へ「復帰」するのは全国的にも珍しいケースだという。現在の高校に就任してからの一年半を中心に報告した。

県教委は、現在の高校に栗川教諭を異動させる際、同教諭をサポートするための常勤講師一人を定数に上乗せして配属。この講師は栗川教諭の教材準備や事務処理などを手伝うほか、栗川教諭が



全国視覚障害教師の会全国研修会

「目が見えない先生だと、生徒の服装の乱れを取り締まれないのではないかと」
 「指摘も赴任当初はあったが、栗川教諭は「生徒指導は心の部分から入っていかないと。表面的な指導では駄目なのでは

離滅された週四時間の授業をカバーして担当している。障害を持つ教師のために常勤の講師を配置するのは、全国的にも極めて珍しいケースだ。
 「今の厳しい状況の中では、何らかの公的な措置がないと、障害者が(教育現場に)ボンと入っても『迷惑だから一緒にやれない』となってしまう」
 (栗川教諭) といひ、この「ヒューマン・アシスタント」は貴重な存在となっている。テストの採点にも困らないし、リポートや感想なども積極的に生徒に書かせることができるという。

ないか」と反論する。夏休み前、生徒が髪を染めて登校したため、生徒指導係の一人として栗川教諭が本人から話を聞いた。栗川教諭は振り返って言う。「お互いがかなりビビリしていることもあって、髪を毛のことから攻め込んでしまうと、気持ちのなかに入っていけないと思った。いろいろ話をしていくと「実はこういうことで学校が面白くない」とか、生徒が抱えている不安なども出てくる。個々のコミュニケーションの中で子供の気持ち聞いていくことはできるのかなと思う」
 栗川教諭は「自分でできるところは自分で努力し、コンピューター機器などで文字を書いたりする。他の教師や生徒のサポートに加え、足りない部分は公的な援助を活用しています」と、明るく話す。だが、視力を失いつつあったころは「自分でも視力低下を受け入れられず、周りにも伝えられなかった」苦しい状態が続いた。ある時、「ありのままの自分をまずさらけ出して、問題点があったらそれを解決していかないと駄目だ」と気づき、それ以降は自分でできないことは周囲に助けを求め、時にはアドバイスを得たりして、いい方向に回転するようになった。盲学校勤務を経て再び普通高校への転勤を願ったのは、障害を持つ人間が一般社会から離れているのでなく、ともに参加していく社会こそ望ましくと強く感じたからだった。

ハンディさらけ出し信頼関係築く
 藤本恵司教諭(三)は九年前、神戸市では初めて点字受験での新採用となった。
 視覚障害教師の会の調べでは、点字受験で盲学校以外の公立学校に採用されたのはこれまでに四人だけ。藤本教諭は「音声ワープロなどの機械、点訳してくれるボランティア、同僚、生徒と、う四つが、壁を崩しかけてくれている。中でも、同僚と生徒の存在はすごく大きい」と、いろいろ存在によってハンディを乗り越えていると話した。だが、同僚や生徒による協力体制は、藤本教諭が信頼関係を築く努力をした結果、得られたもの。「自分が持っているハンディをさらけ出したことで、周りの態度はずっと変わった」と言い切った。
 藤本教諭は言う。「『あなたの夢は何?』と聞かれたら、空元気でなく『目が見えるようになりたい』とは言わないだろう。例えば、見えるようにならないと仕事に就けない、結婚できない、何々ができないという社会が豊かな社会でしようか。私が本当に望んでいるのは、見える見えないが関係ない社会、意見さえあれば参加できる社会です。それを作っていくのは、生徒でしょう」。教師は、生徒を育てる重要な要素の一つ。目が見えなくても生き生きと教壇に立つ教師が周りにいれば、生徒は「人間はお互いに補い合いながら生きていく」という当たり前のことを肌で感じるだろう。藤本教諭の言葉は、ハンディを持つ人とかくかやの外に置きがちな私たちへの、問いかけに聞こえた。

(中島有希 広島社)